

学位（博士）論文要旨

相互行為のなかのジェンダーと身体

—ケア実践の記述に向けて—

首都大学東京大学院 人文科学研究科 社会行動学専攻

2014 年度 博士論文

須永 将史

本論文の目的

本論文では「ケア」をおこなう相互行為実践のなかで、参加者の性別と身体が参加者にとってどのような意味を持つのかを明らかにすることを目的とした。この目的を達成するために、具体的には次のような問いを立て、各章で取り組んだ。すなわち、ケアワークのジェンダー化とはどのような問題なのか、問題ならばケアはどのようにジェンダー化されているのか、ケアのジェンダー化という問題にどのように取り組むことが可能なのか、ケアのジェンダー化に行者自身の性別や身体は影響しないのか、ケアにおける身体性はどのように使用されているのか、以上のような問いである。またそれをふまえ、今述べたような主題はどのような方法によって分析可能なのかという問いも、本論文が答えるべき問いであると考えた。ケアにおける男女の不平等は、大文字の理念によってはうまく取り組むことはできない。その不平等がどのように構成されているのかを解明するためにはケア実践のなかの、不断に構築され、相互行為的に扱われる身体性とジェンダーを考察の範囲に組み込まなければならないのである。このような方針のもと、本論文は構成されている。

以下では、本論文で行なった作業を3つにわけてまとめておこう。

主な論点と各章の構成

第1に、ケアにおける身体性とはどのように問われるのかを明確にするため、gender がどのような概念であり、gender、身体、ケアそれぞれはどのような関係にあるのか解明した。gender は、フェミニズム・ジェンダー論にと

っては身体的差異という問題に取り組むために導入された概念とされているが、一般的な定義である sex/gender という図式的な定義ではケアワークの身体的活動の側面をうまくあつかうことができない。このような図式的な定義はいったいどのように形成されたのか、その系譜を追った。

第2章では、日本におけるジェンダー概念の歴史的系譜を考察した。gender という語は、セックス/ジェンダーの形で普及し、gender の意味はそれぞれ違っていてもセックス/ジェンダーという図式的な定義は定着したままだったことを明らかにした。また第3章では英語圏における gender の系譜を考察した。gender は、John Money にとってはそもそもが身体的差異をも含めた概念であり、sex/gender は Robert Stoller が定式化した区別だったことを述べた。Ann Oakley らフェミニスト社会学者も、gender を sex/gender の区別のもと使用したが、それが彼女たちにとって重要だったのは、身体的差異とは異なる水準であるような領域を示し批判する概念として、利用可能だったからである。

今後もフェミニズムや女性学、そして社会学が gender を使用していくにあたって、Money のもともとの定義が次のようなものであったことを憶えておくことは重要だろう。それはすなわち、もともと gender は身体的差異をも含みうる概念として、言い換えればセックスを包括するような広い概念として定義されたことだ。もちろん Stoller による定義のように、sex/gender、すなわち身体的差異とは異なる水準を示す概念として定義され使用されたことで、批判的な言説の構築にとって生産的だった面もあるだろう。しかしながら、それが sex/gender として結晶化してしまうとき、分析の射程からは、行為者の身体によって遂行される実践が「ジェンダー化される」という重要な現象が抜け落ち排除されてしまう可能性がある。本論文では、このような状況をふまえ、gender の正確な定義を目指すことよりもむしろ、gender 概念が使用されることで具体的にはいったいどのようなことがなされているのか、この点に絶えず注意を向け歴史的系譜を考察することを目指した。

また本論文では、身体が実際に使用され、それによって示されることを身体性 (embodiment) とし、この身体性がケア実践のなかでどのように参加者によって扱われ、相互に理解されるのかということを局所的に記述するとい

う方針を主張した。ケア実践はOakley がもともと gender を使ってその不平等を示そうとしたような実践であり、また身体性はケア実践に不可欠な要素でもある。そして Money が当初用いた gender は身体的差異も含む非常に広い概念なのだから、概念のそもそもの意味においても、身体性を分析に含めることは gender 概念によって可能なのである。実践に目を向けるという方針によって、これまで筆者が述べてきた gender 概念にまつわる齟齬は調停することができるのである。この方針にしたがって、ジェンダー化されたケアワークの詳細を、行為者の意図に即して記述するための方法が検討される。続く第2の点では、そうした方法がどのように検討されたのか振り返ってみたい。

第2に、ケアを行なうことをテーマに、対面的な相互行為のなかで、ジェンダーと身体性を分析するための方法を検討した。第1章では、ケアは、ジェンダー化されている概念でありながら、それはしばしばミクロレベルとマクロレベルが混同して議論されがちであるということが述べられた。そしてこれに対して筆者は、会話によるやりとりを出発点とし、ケア実践がどの様に参加者によって組み立てられ構築されていくのかを分析することが、ジェンダー論・フェミニズム・ケア論・社会学にとつての課題であることを述べた。また第4章では、「会話」だけでなく、身体性も分析の射程に含めるための方法を検討するため、Erving Goffman の議論を検討した。ここでは視線や gesture も含めた、さまざまな相互行為的資源を捉えるために、ビデオによる記録や、そのトランスクリプトの方法が彫琢されてきたことを述べた。

第3に、第5章、第6章、第7章では、検討された方法論を用いて、実際に対面的な相互行為のなかで身体性とジェンダーがどのように扱われているのか、「それを実践する」ひとびとの志向にもとづいた形で示そうとした。第5章では、「痛み」をテーマに、在宅医療の相互行為的場面を検討した。ここでは、質問の組み立てが、患者の応答しやすいようになされていることに着目し、他者の痛みに対する理解の資源として「表情」が用いられていることを示した。第6章では、足湯活動のボランティアの場面で、避難者の会話が続行することに合わせて、インストラクションにあえて違反しながら会話を傾聴するということが達成されていることを示した。第7章では、足湯の基本的な身体配置を出発点に、身体が接触するという事実への言及から、どの

ように相手の性別に言及しうるのか、ということをしめした。相手の身体への言及は、身体評価や性別規範をともないながら、参加者が実際にどのようにそれを処理してゆくのかを示した。

結論

以上、本論文では、総論として、今後ともケアをフェミニズムの課題とするのであれば、ケアの身体的相互行為の側面に照準するという方針で行なうべきであることが述べられた。また、相互行為において参加者がお互いの性別をどのように理解しているのかを論じるためには、身体性は参加者が互いに参照しあう事実であり、それを出発点とすべきであること、このことも述べられた。そして、その身体性を問題提起するためにフェミニズムによって用いられた gender は、今後はその内実を明らかにするために経験的な研究を進めていくべきであることを論じた。これに加えて本稿では、そうした経験的な研究を進めるための具体的な方法が蓄積されてきたことを示し、そうした方法に基づいた研究によって積み上げられる知見を出発点に、フェミニズムや女性学の方針が決められていくことも可能であることを示した。

「男性に介護が向いていない」とか、「女性がケアの担い手にふさわしい」という、いわばケアのジェンダー化をつくりあげうる諸々の主張は、本論文で一貫して主張してきたように、むしろ実際に行われているやりとりのなかでどのような実践がなされているのかを分析した上で、そのような主張の可否を問うべきではないか。筆者はそのような記述の積み重ねをするという戦略を、ジェンダー論の課題として考えてもよいと考える。あくまでも、解明すべき問題は、ジェンダー化されうる身体的実践のなかで、参加者が相互行為を通じてどのようにお互いをジェンダー化し、どのようにそれにまつわる相互行為的な問題に対処してゆくのか、であるように思われる。この解明が、ケアの平等のための議論の出発点になると筆者は考えている。

主要参考文献

- 江原由美子, 1990, 『フェミニズム論争』勁草書房。
 ———, 1995, 『装置としての性支配』, 勁草書房。

- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Anchor.
(=1974, 石黒毅訳『行為と演技』誠信書房.)
- , 1963, *Behavior in Public Places*, New York: Free Press. (=1980, 丸木恵佑・本名信行訳『集まりの構造』誠信書房.)
- Millet, Kate, 1969, 1970, 1990, 2000 *Sexual politics*. New York: Doubleday. (=1973, 藤枝濤子ほか訳『性の政治学』自由国民社.)
- Money, John, 1955, 'Hermaphroditism, Gender, and Precocity in hyper- Adrenocorticism: Psychologic Findings.' *Bulletin of the Johns Hopkins Hospital* 96, no. 3:253-63.
- , 1985a, 'The Conceptual Neutering of Gender and the Criminalisation of Sex', *Archives of Sexual Behaviour* 14: 279-91
- , 1985b 'Gender: History, Theory and Usage of the Term in Sexology and Its Relationship to Nature/Nurture', *Journal of Sex & Marital Therapy*, 11(2), 71-9.
- 西阪仰, 1997, 『相互行為分析という視点——文化と心の社会的記述』金子書房.
- Oakley, Ann, 1972, *Sex, Gender and Society* N. Y. : Harper Colophon Books.
- , 1974a, *Housewife*, Allen Lane. (=岡島芽花訳, 1986, 『主婦の誕生』三省堂.)
- , 1974b, *The sociology of housework*, Allen Lane. (=佐藤和枝・渡辺潤訳, 1980, 『家事の社会学』松籟社.)
- Parsons, Talcott, 1955, in Parsons, Talcott and Bales, Robert Freed, *Family, Socialization and Interaction*, London: Routledge and Kegan Paul. (=1981, 橋爪貞雄訳『家族』黎明書房.)
- Sacks, H., Schegloff, E. A., and Jefferson, G., 1974, "Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking in Conversation", *Language*, 50(4), 696-735. (=2010, 西阪仰訳, 「会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集——順番交替と修復の組織』世界思想社.)
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., and Sacks, H, 1977, "The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation" *Language*, 53: 361-82. (=2010, 西阪仰訳, 「会話における修復の組織——自己訂正の優先性」『会話分析基本論集——順番交替と修復の組織』世界思想社.)
- 庄司洋子, 2013, 「ケア関係の社会学」『親密性の福祉社会学』東京大学出版会.

- 生野繁子, 2003, 「ケアの本質とジェンダー——高齢者ケアをめぐる諸問題の視座として」『アドミニストレーション』9(3/4), 75-104.
- 高橋さきの, 1990, 「フェミニズムと科学技術—生物学的言説の解体に向けて—」, 江原由美子編, 『フェミニズム論争—70年代から90年代へ』勁草書房, 147-75.
- , 2006, 「身体性とフェミニズム」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣, 138-52.
- 山田昌弘, 1992, 「福祉とジェンダー」『家族研究年報』(17).
- , 1995, 「男に高齢者介護は出来ない」『諸君』10月号.
- 山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか—性別分業の再生産を超えて』勁草書房.

(すなが まさふみ・神奈川大学非常勤講師)